うたごえ運動とは何か
ミーム学の視点から考える

Deconstructing the "Utagoe" Movement:
A Memetic Perspective

神 長 英 輔 *

要旨

1950 年代，全国各地で若者の合唱サークルが組織された．1940 年代末に起こったこの運動はうたごえ運動と呼ばれた．うたごえ運動は文化運動，労働運動，反核平和運動と連携し，1950 年代半ばに最盛期を迎えた．しかし，早くも 1960 年代前半には人気を失った．この運動はどのようにして同時代の若者の心をとらえたのか．またなぜ若者の心はうたごえ運動から離れていったのか．この論文は進化論の観点から文化を理解するミーム学の知見を用いてこの疑問に答える．

ミームとは模倣であり，遺伝子に似た「文化の自己複製子」として理解される．うたごえ運動とは「正しく，美しく歌え」などの指示のミーム，「歌の力によって大衆を組織し，世を動かす」という物語のミーム，ミームとしての歌からなるミーム複合体である．うたごえ運動が拡大し，一転して衰えた過程はこれらのミームが複製された（されなくなった）過程として説明できる．

キーワード：進化論　ミーム　物語　うたごえ　ロシア民謡

序 ミーム複合体としてのうたごえ運動

1950 年代，日本各地の若者たちは続々と職場や学校で合唱サークルを組織した．この動きはうたごえ運動と呼ばれた．うたごえ運動は文化運動，労働運動，反核平和運動と連携して 1950 年代半ばに最盛期を迎えた．1955 年頃，全国の職場合唱サークルは 10 万団体を超え，うたごえ運動の年次大会には 3 日間でのべ 3 万人が参加していた[1]．しかし，うたごえ運動の勢いは 1960 年代前半に衰えた．同時に社会的な影響力も失われた．

この運動はどのようにして同時代の若者の心をとらえたのか．またなぜ若者の心はうたごえ運動から離れていったのか．私は進化論の観点から文化を理解するミーム学の知見を用いてうたごえ運動の盛衰を説明したい．

ミームとは模倣である．また，ミームとは遺伝子に似た概念であり，文化の自己複製子である．この論文はスタノヴィッチによるミームの定義にしたがう．すなわち，ミームを「他者の脳内に複製されたとき，根本的に新しい行動および（または）思考を生成する潜在的力を持つような脳制御の一状態（または，そのような情報のありかた）」[2] として考える．ミームの利益とはもっぱら自己の複製である．ミームはそれ自身が複製されやすいがゆえに複製され, 広がっていく．ミームに意思がないのはもちろんであり，それは遺伝子と同じである．いわゆる不幸の手紙やコンピュータウイルスはわかりやすいミームである．ほかにもさまざまなデザインやアイデアをミームとして理解することができる．

ミームはそれを受け入れる宿主（人間）の意思や利益にあまり関係なく複製され伝播されてい

* 情報文化学科 准教授

く．チェーンメールはそれが複製されやすい特徴をもつがゆえに複製される．それを複製する(してしまう)人がその複製から利益を得ることはない．複製によって利益を受けるのはチェーンメールそれ自身である．

ミームという概念に基づいて文化の発展＝進化を考えることについては批判がある．ミーム概念には曖昧さがつきまとい，ミームを擁護する論者の間にも見解の相違がある．その一方でミーム概念を利用して説得力ある結論を得た論考も多い[3]．この論文ではミーム概念の有用性について立ち入った議論はしない．この論文におけるミーム概念の有用性はうたごえ運動の発展と衰退の過程を説明するという論文の主題に即して判断したい．

うたごえ運動は複数のミームの複合体である．具体的には「正しく，美しく歌え」,「自発的に合唱サークルを組織せよ」,「よい歌を歌え」,「歌うことによって生活は変わる」,「歌うことによって日本(世界)は変わる」などという指示のミームや物語のミームの複合体がうたごえ運動である．

こうしたミームが人々の脳に情報として複製され，その情報に基づいて人々が行動し，行動の結果，それらのミームが他人の脳に複製され，ミームは広がっていく．例えば,「正しく，美しく歌え」などミームの指示にしたがう人が自ら合唱サークルを作ると，そのサークルにおいてはその人の音楽指導を通じて「正しく，美しく歌う」という指示のミームが複製される．また,「歌うことによって日本（世界）を変える」という物語のミームは合唱サークル内の討論やデモ参加を通じて広まる．

うたごえ運動というミーム複合体を構成するミームは大きく三つに分けられる．指示のミーム，物語のミーム，ミームとしての歌そのものである．

指示のミームとはある行動を直接促すミームである[4]．あるミームが指示する行動が別のミームの複製を助けることもある．あるミームが指示する行動が別のミームの複製に有利な条件を作り出すのである．また，物語のミームとはうたごえ運動の参加者に共有されていた物語である．物語のミームはうたごえ運動に関係する出来事を因果関係で明快に説明することができる．

ミームの複製の成否にはそのミームが存在する環境が大きく関わっている．うたごえ運動の場合でいえば，1950 年代のさまざまな状況，すなわちミームにとっての環境とうたごえ運動のミームそれ自身の相互作用がミームの運命を決めた．これはある環境における生物の生態（その生物の繁栄と絶滅）を説明することに似ている．この論文ではうたごえ運動の盛衰の過程を時代状況という環境におけるミームの適応として説明する．

なお，うたごえ運動とうたごえ喫茶は別物である．うたごえ運動は自発的に組織されたサークル活動だが，うたごえ喫茶は客として店に足を運んで歌うものである．また，うたごえ運動の最盛期は 1950 年代半ばだが，うたごえ喫茶はそれより遅く 1950 年代末から 1960 年代前半にかけて最盛期を迎える．うたごえ運動の愛唱歌とうたごえ喫茶の愛唱歌は重なりつつも，相違点が多い．また，それぞれの参加者・客も重なっているようで違いがある．この論文はうたごえ運動を主な対象とする．

1 指示のミーム

1.1 指示のミーム「正しく，美しく歌え」

うたごえ運動において注目すべき指示のミームは「正しく，美しく歌え」と「よい歌を歌え」の二つである．この二つの指示のミームはうたごえ運動を語る多くの言説で見られる．

「正しく，美しく歌え」という指示はミームとして成功していた．「正しく，美しく歌え」とい

う指示が文字通りの表現で主張されていたわけではない．しかし，『うたごえ新聞』などの歌唱指導の記事は明らかに「正しく，美しい」歌唱を目指すべき模範として掲げていた[5]．

この指示のミームの成功は当然のように見えるが，そうとも言い切れない．多くの人が「うまく歌い」たいと願うものだが，それは「正しく，美しく歌う」ことと違う．なぜ若者は「正しく，美しく歌う」ミームを受け入れたのか．

「正しく,美しく歌え」という指示には「クラシック音楽の声楽を範とする」という前提がある．そして，実際にうたごえ運動の指導者の頂点には名望ある声楽家がいた．音楽学校を出た職業音楽家に絶大な権威があった時期だからこそ，このミームは成功したのである．

正しく，美しく合唱するためにはある程度の音楽の知識が必要だが，当時の若者の多くは義務教育の音楽教育しか経験がない．だから，指導者や伴奏者が必要だった．彼らにとって合唱サークルは「正しく，美しく歌う」ための手段だった．

彼らが合唱サークルを組織するにあたって範としたのが中央合唱団だった．中央合唱団は東京音楽学校出身の著名な声楽家, 関鑑子（せきあきこ, 1899-1973）によって 1948 年に結成された．団員は日本共産党の青年共産同盟（当時）の構成員であり，関自身も党員とされる．中央合唱団には 6 か月コースの研究生制度があった．コースの修了者は団員になるか，各地で自らが主宰となって合唱団を組織した．

中央合唱団は全国各地におもむいて合唱サークルの指導に当たった．また，外国曲の紹介もおこなった．その後，中央合唱団を母体として音楽センターが作られた．音楽センターは歌集や機関紙の発行，合唱大会の運営，レコードの発売などを通じてうたごえ運動の普及に努めた．音楽センターが発行した楽譜つきの歌集『青年歌集　第一集』（定価 70 円，初版 1951 年 11 月）は 20 万部のベストセラーとなった[6]．

合唱サークルの組織を志した若者は中央合唱団の門を叩くか，中央合唱団から指導者の派遣を仰いだ．そこまでしなくても，雑誌の記事を読んで中央合唱団が提案するように，つまり，ほかのサークルがやっているようにサークルを組織した．このようにして指導ないし影響を受けた結果，彼らは自発的に「正しく，美しく歌う」ことを重視するようになった．

うたごえ運動においては組織の自発性が尊重され，評価された．しかし，自発的な運動をめざせばめざすほど，自発的な活動を支援するという中央合唱団のノウハウに依存することになった．「正しく，美しく歌え」という指示のミームは合唱サークルの規範として複製された．指示のミームは合唱サークルを通じて自己の複製に成功したのである．

先に述べたとおり，「正しく，美しく歌え」という指示のミームは「本来あるべき歌唱（合唱）」を前提としていた．「正しい」合唱の模範例として混声四部が示され[7]，「正しく，美しく歌う」という指示は両性からなる合唱団の組織を促すことになった．

こうして，合唱サークルの組織を理由として男女の交流が促された．旧制大学以来の男性が多い大学と女子大学の合唱サークルが互いに交流して，いわゆる「インカレ」サークルが多く誕生した[8]．また，女性の多い職場（サービス業や軽工業の従業員）と男性の多い職場（運輸業や重化学工業の従業員）が合同して合唱サークルを組織する例も多かった[9]．異性との交流が若者の行動に大きく影響するのはいうまでもない．異性との出会いがサークル参加の動機づけになっていたのは確かだろう．

「正しく,美しく歌え」という指示のミームは歌そのものが正確に複製されることにも貢献した．つまり，ミームとしての歌そのものと「正しく，美しく歌う」という指示のミームの（自己をで

きるだけたくさん複製するという）利益は一致していた．

先に述べたとおり，合唱サークルは「正しく，美しく歌え」という指示のミームを効率よく複製するための装置だった．全国各地の合唱サークルは自発的に組織されたものだが，模範とされる合唱サークルのあり方は共有されていた．彼らは毎回ではないにせよ，音楽の知識をもつ指導者を迎え，ピアノやアコーディオンによる伴奏者とともに，何らかの大会イベントへの出場を目標として練習していた[10]．

指導者が「正しく，美しく歌え」と説くこと，伴奏によって正しい音を聞くこと，そして『青年歌集』のような歌集が出版されること，これらは「正しく，美しく歌う」という指示のミームの実践であり，同時にミームとしての歌そのものが効率よく複製されるためのよい条件である．また，後で述べるとおり，合唱という行為は歌の正確な複製に貢献することによってミームとしての歌の利益にもなっている．つまり，「正しく，美しく歌え」という指示のミームとミームとしての歌そのものは協調して自らの複製に成功したのである．

歌は各種のメディア上で互いに熾烈に競争し，新しく生み出される無数の歌のほとんどは競争の敗者となって誰にも歌われずに忘れられていく．そうしたなか，うたごえ運動で取り上げられた歌はより良い環境の中で自己を複製することができた．

歌いたい若者も合唱サークルに入ることでさまざまな利益を得た．楽譜が読めなくても多くの歌をおぼえることができた[11]．指導をあてにすることができた．異性と付きあう機会も得られた．こうして，「正しく，美しく歌え」という指示のミームはミームとしての歌と協調し，合唱サークルという環境において成功した．

1.2 指示のミーム「よい歌を歌え」

「正しく，美しく歌う」ためには規律ある合唱サークルと知識ある指導者が必要だった．指導者の存在は権力関係の存在を意味した．「歌いたい歌を歌おう」とはいうものの，歌うべき歌を決める上で大きな権限をもっていたのは指導者だった．様式の点でうたごえ運動の名残を残すうたごえ喫茶でも，次に歌う歌を決めるのは壇上で歌うリーダーだった．

確かに曲の選定を投票で決めるサークルもあった[12]．しかし，そうだとしても，運動全体においてはみんなが歌うべき歌を決める権威があった．それが中央合唱団（音楽センター）であり，有力な大学サークルだった．彼らは各種の雑誌や『青年歌集』シリーズで新しい歌を紹介し，歌うべき歌を決めた．

歌うべき歌を決めるという権威のあり方は社会主義革命における前衛の発想に通じる．選ばれた人々が革命の前衛となって大衆を指導するというものだ．中央合唱団の成立の経緯をみれば，これが偶然とは思えない．ただし，中央合唱団が意図的にそういう権威であろうとしたわけではないだろう．歌いたい若者は歌う利益を優先するために自発的に権威に服従したのである．それを裏づけるように，ラジオやテレビやうたごえ喫茶が多くの歌を提供するようになると，多くの若者は権威のもとを去った．

歌うべき歌を決める過程では「（低俗ではない）よい歌を歌え」という指示のミームが成功した．よい歌の代表格はロシア民謡とうたごえ運動のなかで創作された反戦の歌だった．一方，低俗な歌とは商業音楽の流行歌，すなわち（ジャズやマンボなどの外国曲を含む）歌謡曲であり，とりわけ春日八郎の「お富さん」（1954 年，キングレコード）が繰り返しやり玉に挙げられた[13]．

もちろん，よい歌ないし悪い歌を決める客観的な基準はない．「お富さん」がダメな理由はわ

かるようでわからない．歌うべき歌を決めるには権威が必要であり，それが中央合唱団＝音楽センターだったにすぎない．権威への信頼ゆえに「よい歌を歌え」という指示のミームが広く受け入れられたと考えるべきだろう．

この時期，中央合唱団のいう「よい歌」を歌うためには合唱するほかなかった．普通にラジオを聞き，映画を見ているなかで，普通の人が「よい歌」に巡りあうことは難しかった．NHK ラジオはもちろん，当時の民放ラジオがロシア民謡を放送するのはまれだった[14]．「よい歌」を歌うには合唱サークルに入って歌うか，登山サークルに入って山で歌うほかなかった[15]．

楽譜つき歌集の『青年歌集』シリーズを自分で見て歌えばよいともいえるが，普通の（音楽の知識が乏しい）人が歌詞と楽譜だけを見て歌うことはできない．よい歌を歌いたいのならば，何らかの集まりに参加し，歌われる歌を聞いてその歌をおぼえるほかなかった．

「正しく，美しく歌え」と「よい歌を歌え」という二つの指示のミームは合唱サークルを通じて自己の複製に成功した．この二つのミームを受け入れて合唱サークルに参加することは，ミームの乗り物である若者の利益（歌いたいという欲望を満たすことと異性と付きあう機会を得ること）にもかなった．こうして合唱サークルの組織運動，すなわちうたごえ運動は拡大したのである．

2 物語のミーム

2.1 指示のミームと物語のミーム

物語を複製するのはたやすいし，自分で物語を作るのも難しくない．われわれは過去の出来事や未来の出来事を物語によって語り，因果関係を説明する．私たちは物語を人に話し，人に向けて書くことで複製する．別の物語を変形させて新しい物語を語ることもできる．つまり，物語はミームになりうる．

物語の構造の正確な複製は容易である．また，物語は文字メディアを中心に広まる．文字メディア上での複製は多産であり，なおかつ長命である．このように物語はミームとしての優れた特徴（正確な複製，多産性，長命）を持っている．この特徴は遺伝子がもつ特徴と同じである．

人は物語によって過去，現在，未来の出来事を因果関係として語ることを好む．これは認知科学の基礎的な知見に合致する．人間の認知システムのなかにはできごとをお話として説明する作話的傾向がある[16]．つまり，出来事を物語として説明するのは人間の自然な性向である．

物語のミームは指示のミームと協調しうる．物語のミームはある指示のミームを受け入れてそれに基づいて行動するための根拠づけになる．物語のミームが指示のミームに基づいて行動する理由を因果関係として語ってくれるのである．このようにして，ある物語のミームは別の（指示の）ミームにとって自らを複製させる助けになる．つまり，指示のミームと物語のミームは協調して増え，物語のミームは多くの人に受け入れられる．以下ではこの過程をうたごえ運動に即して見ていこう．

2.2 うたごえ運動の物語ミーム

うたごえ運動が上り坂にあった 1950 年代前半，「国民文学」ないし「国民文化」をめぐる大きな論争があった．大まかに言うならば，それは「国民一般の切実な課題に応える文学はどのようなものであり，誰が担い手となるべきか」という議論である[17]．議論の中心にいたのは知識人だったが，議論に触発された多くの人々はさまざまな文学運動に参加していった．

議論の対象は文学からやがて文化一般に広がった．うたごえ運動も議論の対象になった．論争

のなかでうたごえ運動は「民族解放のための運動」として語られた．そうした議論のなか，アメリカで生まれた，ないしアメリカを経由して紹介された，ロカビリー（ロックンロール）やマンボは低俗な歌とみなされ，それらの音楽を愛好することは「植民地根性」として批判された[18]．もちろん日本の歌謡曲も嫌われた．娯楽性を追求するばかりで国民の切実な課題に応えていないと批判されたのだ．

「民族解放のための運動」として歌が語られる際にはコンテンツ以外のもの，政治的な直接行動の手段として歌がもつ力が問われた．

1950 年代は「民族解放」のための政治行動が盛んだった．それは砂川紛争（東京都）や内灘闘争（石川県）などの米軍施設などに対する反対運動であり，第五福竜丸事件に端を発する反核平和運動であり，安保闘争だった．多くの合唱サークルがこれらの運動に参加した[19]のはもちろん，実力行使の際には必ず歌が歌われた．また，1950 年代には労働争議も頻発したが，これに際しても労働者は歌を歌った．当然ながら，うたごえ運動の言説において歌の力は積極的に評価された．例えば，「（米軍施設反対運動の当事者である）住民は現場における中央合唱団の合唱を白い眼で見ていたが，やがていっしょに歌うようになった，これぞうたごえの力だ」と自賛された[20]．

ただし，こうした状況では「みんなといっしょに歌」わないほうが難しい．そのことは共通知識の理論で説明できる．人々が一堂に会して合唱することで，「自分がみんなと同じ歌を歌っている」ということをまわりの人は見て（聞いて）わかっており，「みんながそのことをわかっている」ということをみんなはさらに知っていることになる．こうした認識が共通知識である．共通知識は協調行動を促しやすい[21]．競技場で多くの人が起立して国歌斉唱に参加するのは国歌斉唱を積極的に好んでいるからというより，自分が参加していないことが共通知識として露骨に明らかになってしまい，過剰な意味が発生することをおそれるからである．共通知識が簡単に生成されやすい環境下で協調行動に参加しないのは難しい．

合唱は直接的な政治行動のなかで重要な役割を果たした．ただし，それはうたごえ運動固有の影響力ではなく，国民文化をめぐる議論の中でうたごえ運動が勢力を広げていたからであり，共通知識の理論における一般的な帰結でもある．

ミーム学の視点に立てば，別の説明も可能である．人は自分の意見に賛成してくれたり，自分の行動に協調してくれたりと，自分を模倣してくれた人間に対してより親切に振る舞うことがある．同時に人は恩義を感じた人の行動を模倣したり，その人の意見に同調したりすることがある．つまり，模倣（すなわちミームの受け入れ）と恩義は交換可能である[22]．うたごえ運動の場合でいえば，助けに来てくれた合唱団のまねをして（ミームを受け入れて）合唱に参加することで，助けてくれた恩義を帳消しにするということになる．

中央合唱団がボランティアで指導者を派遣して各地で合唱指導をしたことについても同様の説明が可能である．わざわざ来て指導をしてくれたことに対し，その人たちのいうことを聞き，「正しく，美しく歌う」，「よい歌を歌う」などの指示のミームを受け入れて恩義を帳消しにしようとするのである．

これは合唱サークル内の指導者と被指導者の関係にも当てはまる．歌や歌い方を教えてくれた恩義に対して人はミームを受け入れることで応える．サークルが自発的な集まりであるからこそ，指示のミームは積極的に受け入れられたのである．

この時期，一般の人々の文化的活動の模範としてサークル活動は高く評価されていた[23]．なか

でも 1940 年代の後半には各地で詩歌のサークルがいち早く組織された．サークルは職場や学校のほか，地域単位でも組織された．そもそも「うたごえ」という名称はこうした詩歌のサークルから現れた．国立国会図書館の所蔵図書目録や雑誌記事索引を「うたごえ」というキーワードで検索してみると，1950 年代はじめまでの「うたごえ」関係の文献はほぼすべてが詩歌サークルに関するもので，いわゆるうたごえ運動はもちろん，音楽に関わるものはほとんどない．

それらの詩歌サークルの多くでは国民文学論争に沿った議論がおこなわれていた．なかでも有力な歌人の戦争協力への批判や，「一般の人々が生活に即した詩歌をうたうことで世のあり方を問うことを説くべきだ」とする議論が多かった[24]．後者は後年のうたごえ運動の主張と重なる．「素人が自ら芸術活動にいそしみ，可能ならば創作も手がける．こうした活動，生活の場に根ざした活動こそが世を大きく動かしていく」という主張である．「世を動かす」とは革命のことだろうが，これらの主張において革命が目標であることを明言しているものはほとんどない．革命を具体的な目標として掲げることは慎重に避けられていた．

こうしたサークル運動やうたごえ運動，さらにはその理論的根拠になった国民文化をめぐる議論で主張されたことはミームとしての共通点をもっている．一連の運動のなかで複製されていたミームとは，政治状況と文化運動の関係を説明し，来るべき未来（明言はされないが，つまりは革命）が訪れることを説く物語のミームである．

うたごえ運動というミーム複合体のなかで繰り返して語られていた物語のミームは次のようなものだ[25]．

新しい時代の建設を担うのは転向不要の若者たちである．若者による自発的な運動がうたごえ運動である．若者はサークルに集い，明るく健康的な歌を元気に歌うことで生きる力を得る．こうして知りあった若者のあいだには自然と友情や恋愛感情が生まれ，互いの人生や生活について正直に語り合うようになる．連帯感をもった若者たちはそのうち世の中についても語り合い，行動するようになる．サークル相互の交流も次第に発展し，全国さらには世界の若者が友情のもとで団結するようになる．音楽の力で団結した若者はやがて世界を大きく動かす．

物語とは歴史的な時間を想定し，その時間のなかで出来事を因果関係で関連させて語るものである[26]．「若者が自発的に連帯し歌を歌って世を変える」という物語は歴史的時間のなかにうたごえ運動を位置づけるものである．国民文学(文化)をめぐる議論のなかにすでに似た物語があり，左翼運動のなかでも同様の構造をもつ物語が語られていた．似た物語の存在がうたごえ運動の物語ミームの受け入れを容易にしたと考えられる．

こうして国民文化の進歩を語る物語と来るべき革命を語る物語とうたごえ運動の未来を語る物語はミームとして協調し，文字メディアという環境のなかで自己の複製に成功した．

物語は現実に起こっている出来事を説明するために大いに利用された．より正確に言うならば，出来事を出来事として語るためには物語が不可欠である．野家啓一がいうように，「一つの出来事を同定しようとすれば（略）それを確定する「視点」と「文脈」とが要求される」のであり，「この視点と文脈をあたえるものこそ，われわれの言う『物語り（narrative)』にほかならない」のである[27]．全国大会である「日本のうたごえ」の盛況，『青年歌集』のよい売れゆき，中央合唱団関係者の外国公演，中央合唱団の指導者，関鑑子の国際スターリン平和賞受賞などはこの文脈で語られた[28]．

また，物語は過去の出来事に対して視点と文脈を与えるだけでなく，未来の出来事を想像するための手がかりにもなった．ブレモンによれば，人間は「(略）プランをたてたり，状況の発展可能性を想像して検討したり（略）するとき，人々は理解可能な最初の物語を自らに語る」[29]．人々は進むべき道を展望するために物語を使うのであり，物語なくして運動はありえないのだ．

2.3 安保闘争とうたごえ運動の挫折

うたごえ運動の物語ミームはすでにありふれていた別の物語ミーム（国民文学論争や来るべき革命の物語）と共適応的だったために広く受け入れられた．しかし，こうした条件が整っていたのは一時的だった．この時期はさまざまな物語のミームが競争する主戦場が雑誌や新聞などの文字メディアだったが，その後，1950 年代後半にはラジオ，映画，新聞などの情報量が急激に拡大する．うたごえ運動の主な媒体は一部の雑誌と自前のごく小規模の新聞だったため，うたごえ運動の物語ミームは急激に狭いニッチ（生態的地位）に追いやられた．

うたごえ運動の物語ミームの運命に決定的な影響を与えたのは 1956 年のスターリン批判と 1960 年の安保闘争（とその敗北）だった．うたごえ運動の物語ミームはこの二つの出来事を同定するための視点と文脈を与えることができず，うたごえ運動の物語ミームが提示した視点の信頼性は失われた．

まず，うたごえ運動がめざすべき輝かしい未来はスターリン批判によって汚された．皮肉にもうたごえ運動の指導者である関鑑子はスターリン批判の直前，1955 年 12 月に国際スターリン平和賞を受賞していた[30]．

1960 年の安保闘争のデモ隊は国会を包囲し，デモ隊の人々は歌を歌って連帯した．しかし，岸内閣は退陣したものの，条約は自然承認された．歌の力の限界が示され，やはりここでも物語ミームが示した視点と文脈の有効性が失われた．

物語ミームにとってさらに不運なことに，人々はデモの現場で歌の力の限界を共通知識として広く共有してしまった．デモに参加した多くの人が「歌って連帯したにもかかわらず，結果が得られなかった（歌の力で世を変えることはできなかった)」ということを目撃し，さらに「できなかった」ことを多くの人が目撃していたということを知った[31]．こうした状況で人々がうたごえ運動の物語のミームを信頼し続けるのは困難だった．

3．ミームとしての歌

3.1 ミームとしてのロシア民謡

ミームとしての歌は人間の脳の中に残るべく互いに競争し続けている．同時代においてうたごえ運動の歌はラジオやレコード，映画や音楽喫茶をニッチとしていた歌謡曲と競争を繰り広げ，短期的にはそれらに勝利した．しかし，長期的には『お富さん』やロカビリーの歌曲が勝利を収めた．21 世紀の現在，テレビで回顧される 50 年代の歌は後者である．

ミームとしての歌はそれ自身の音楽的な要素によって多くの人に好まれ，自身の複製に成功することができる．しかし，複製の成功には多くの人に聞かれる（歌われる）ことが重要である．

ミームの適応戦略の一つには並列情報処理と多数原理がある．並列情報処理と多数原理はコンピュータによる情報処理の基本であり，情報としてのミームが効率的に複製される方法の一つでもある[32]．合唱を通じて歌が記憶される過程はこの原理によって説明できる．合唱において全員は同時に一つの歌を歌う．この際，全員が完全にその歌をおぼえていなかったとしても，全員と

してはおおむね正確にその歌を歌うことができる．

合唱はそれに参加する人にとっても，ミームとしての歌そのものにとっても利益になる．参加者にとっては歌を容易に記憶し，多少うろおぼえであっても気軽に歌うことができる．歌そのものにとっては多くの人に歌ってもらうことで多くの複製の機会が得られる．ミームとしての歌は合唱として歌われることによってより大きな成功を得るのだ．

うたごえ運動ではロシア民謡が特に好まれた．ロシア民謡の歌曲それ自身に音楽的な魅力があったのはもちろんだ．しかし，ミーム学の立場で考えるなら，ロシア民謡を歌うことがミームとしてのロシア民謡の利益になり，さらに他のミームの利益にもなったからこそ，ロシア民謡が広く歌われた（歌としてのミームそれ自身が成功を収めた）ともいえる．以下ではこうした視点からミームとしてのロシア民謡が受け入れられた過程を説明する．

3.2「よい歌」をめぐる権力闘争

うたごえ運動の内部で優勢だったのは（ソ連の歌謡曲を含む）ロシア民謡である[33]．実際の合唱の現場で歌われていた歌を統計的に知るのは困難だが，『青年歌集』などの構成を見れば，ロシア民謡の人気は明らかだ[34]．うたごえ運動と関係の深いうたごえ喫茶の店名が「ともしび」や「カチューシャ」など，ロシア民謡の曲名に由来していたこともロシア民謡の人気を裏づける．さらには2000年代以降にリバイバルされ，各地で流行している「うたごえ（喫茶）」を冠した合唱イベントでもいくつかのロシア民謡が歌われている[35]．実のところ，これらのイベントで歌われる曲目はうたごえ運動よりはうたごえ喫茶に縁の深い曲が多く[36]，現代のうたごえと1950年代のうたごえ運動をつなぐ縁はロシア民謡だけである．

なぜロシア民謡が好まれたのか．ここではミームの視点，つまり，他の歌よりも適応に有利だった条件に注目したい．

音楽的要素に注目するなら，狭義のロシア民謡の多くは明らかに短い．実際に演奏されたものを聞くと明らかだが，速めのテンポで進行し，一番から三番まで歌っても短いものが多かった．短いことは複製に有利である．そもそも民謡は長年の競争に勝利してきたミームであり，うたごえ運動のなかで新たに作られてきた歌曲よりも潜在的な競争力を備えていた．そのことは現在のうたごえイベントにおいて狭義のロシア民謡がより多く生き残っている理由のひとつでもある．ただし，曲が短いことは民謡一般の特徴である．これだけではミームとしてのロシア民謡が特に優れていた理由にならない．

私はロシア民謡が他のミームと利益を共有していたことに注目したい．

うたごえ運動の参加者の大多数はただ楽しく歌いたい若者だったが，その指導者は（程度の差こそあれ）革命を志向する若者，特に当時の社会のエリートだった大学生と既存の音楽界のあり方に疑問を持ち，うたごえ運動に期待する若手の職業音楽家だった．楽しく歌いたい若者の多くは音楽知識をあまり持っていなかった．彼らの大半は歌うべき歌を決める権力闘争から疎外されていた．その結果，革命を志向し，サークルの組織作りに熱心な学生（合唱サークルの指導層に重なる）[37]や若手の音楽家が権力を握った．両者の目標は異なっていたが，ロシア・ソ連の歌曲を好む点では多数の若者もあわせて意見が一致した．

学生サークルの指導層はうたごえ運動のエリートだった．東京大学の合唱サークル，東大音感合唱研究会の合唱団はさまざまな政治運動に参加しつつ，『泉のほとり』や『国際学連の歌』など外国曲の訳詞を手がけた．この音感合唱団はうたごえ運動全体で指導的な地位にあった音楽家

の北川剛や関忠亮（関鑑子の実弟で声楽家）を指揮者に迎えていた．また，東京大学の別のサークル，トニカ合唱団はやはり著名なチェロ奏者の井上頼豊を指揮者に迎えていた．彼らは専門の音楽家を迎え，自ら運動の普及活動に努め，長期休業中は農村工作（！）に出かけた[38]．彼らは紛れもなくうたごえ運動のエリートだった．

うたごえ運動を指導した音楽家たちは西洋の古典（クラシック）音楽の教育を受けてきた人々である．彼らはそれまでの音楽界のあり方に批判的だったものの，コンテンツとしては（新しい音楽であるジャズやロックンロールを含む）「低俗な音楽」を嫌い，クラシック音楽の美学に忠実だった．その結果，彼らは音楽家が商業主義とは無縁で自由に活動できる理想の国としてソ連に憧れ，職業専門家が高く評価され，かつクラシック音楽のよき伝統をもつ（と彼らが信じた），ロシア・ソ連の音楽を積極的に評価した[39]．当然，彼らはロシア民謡を高く評価した．

若き音楽家たちの考え方に共通しているのは進歩史観である[40]．「ロシア・ソ連の音楽は19世紀後半から順調に発展して現代に至るが，日本の音楽は未だ後進的である」という見解である（それでいて，彼らはジャズやロックンロールなどの「新しい」音楽を認めなかった）．彼らはグリンカやチャイコフスキーを引き合いに出して，ロシアの民謡や民族音楽が「専制政治と戦うなかで芸術的に高度な形式を備え，理想的な国民音楽として発展してきた」と論じた[41]．国民音楽という表現は同時代の国民文学論争と無縁ではないだろう．

彼らにとってうたごえ運動は同時代のソ連の音楽のような「理想的な国民音楽」（と彼らが信じていた音楽）を作り出すための運動だった[42]．音楽家と革命家は進歩史観を共有していた．音楽の発展と社会の発展というコンテンツは異なるものの，そのメタメッセージである進歩史観は共有されていた．それゆえ，ロシア民謡は音楽家にとっても革命家によっても「よい歌」だった．ロシア民謡はうたごえ運動への参加を彼らに動機づけた進歩史観，すなわちうたごえ運動の物語ミームによって「よい歌」であることが説明しやすい歌だった．ロシア民謡というミームの利益と物語ミームの利益は一致していたのである．こうしてミームとしてのロシア民謡はうたごえ運動の指導者たちに受け入れられた．そして，歌詞自体に政治性が薄かったことで，政治色を嫌う多数の若者[43]もこれを受け入れたのである．

3.3 うたごえ運動からうたごえ喫茶へ

1951年9月，大阪と名古屋で日本初のラジオ民間放送が始まった[44]．これ以後，1950年代後半にかけて全国各地でラジオの民間放送が次々と始まった．同時期にはテレビ放送も始まった．うたごえ運動は民間放送の開始直前に興り，民放ラジオ・テレビの草創期に最盛期を迎えていた．

当時の一般家庭にとってテレビ受信機は高嶺の花だった．この1950年代半ばはラジオの黄金時代だった．ラジオの主力はやや大型の据え置き型であり，一般家庭ではみんなで一つのラジオを聞くのが普通だった．

ラジオの小型化が進むのはトランジスタラジオが実用化された1950年代後半である．東京通信工業（現・ソニー）が開発した小型トランジスタラジオは1950年代後半に爆発的に普及した[45]．うたごえ運動について熱く語る同時代の雑誌記事の傍らには「ラジオをもって海・山へ」とうたう広告がしばしば見られた．

ラジオの小型化とその普及，そして1960年前後のテレビの普及はうたごえ運動の衰退と並行している．これはミーム学の立場から説明できる．ラジオとテレビの登場によって世に放たれる歌の数は大幅に増えた．これはミームとしての歌の競争が激化することを意味した．そして歌の

複製の正確性でいえば，『青年歌集』や合唱サークルはラジオやテレビにはるかに劣った．さらにラジオとテレビによって複製される歌ミームは圧倒的に遍在的（ユビキタス）だった．これによってうたごえ運動を主たるニッチとする歌は一気に弱い立場に追いやられた．

ラジオの小型化は「一家に一台」から「一人に一台」の普及を促した．この結果，番組編成に大きな変化が生まれた．「どの時間帯に誰が聞いているのか」ということを前提として番組が編成されるようになった[46]．1950 年代までは NHK でも民放でもクラシック音楽や邦楽が多かったが，1960 年以降，クラシックや邦楽は民放から姿を消し，若者向けの歌謡曲がより頻繁にラジオで放送されるようになった[47]．

うたごえ喫茶が誕生するのもこの時期である．うたごえ喫茶の歴史は 1956 年，東京・新宿の食堂『味楽（みらく）』がロシア民謡のレコードをかけ，それにあわせて客と店員が歌ったことに始まる[48]．この『味楽』がロシア民謡の曲名でもある『灯（ともしび）』と店名を改め，うたごえ喫茶として人気を博して後，1950 年代末から 1960 年頃にかけて全国各地にうたごえ喫茶が続々と誕生した．

早くも 1960 年にはテレビでうたごえ喫茶が紹介され，うたごえ喫茶の愛唱歌がテレビで放送されていたことが確認できる[49]．1960 年代前半には「うたごえ」を題したレコード盤が次々と発売されたが[50]，それらに収録されていた歌はいくつかのロシア民謡を除いてはうたごえ喫茶で愛唱された曲であり，うたごえ運動で愛唱されていた曲目とはややずれがある．さらにはロシア民謡に似た歌謡曲が創作され，人気歌手が歌って人気を博した[51]．これは完全にうたごえ運動の外の現象だった．

当初，うたごえ運動の愛唱歌とうたごえ喫茶の愛唱歌にそれほど違いはなかった．実際，うたごえ運動の参加者がうたごえ喫茶に通っていたこともあった[52]．しかし，うたごえ喫茶が増えるに伴い，その違いは大きくなった．うたごえ運動にとってうたごえ喫茶は参加者を取り合う競争相手だった．そしてうたごえ運動は競争に敗れた．

楽しく歌いたい若者，楽譜が読めない多くの若者，みんなで歌いたい若者にとってうたごえ喫茶はすべての点でうたごえ運動にまさった．都市部において特にそれはあてはまった．うたごえ喫茶はうたごえ運動よりも参加が自由だった．行こうと思えば毎日でもいけるし，足が遠のいても気まずい思いをすることがなかった．誰かに指導されることもなかった．うたごえ喫茶は商売上の理由から客のリクエストに応じることが多く[53]，うたごえ運動のサークルよりも歌いたい歌を歌える可能性が高かった．デモなどの政治運動に巻き込まれる可能性もなかった．常連となって友人を作ることもできたし，一見の客として他の客と距離を置くこともできた．

こうしてうたごえ運動は参加者が歌を複製する場としての優位を失った．そしてこれに安保闘争の敗北が重なった．歌を歌いながら連帯した若者の実力行使は安保条約破棄という目的を達成できなかった．歌の力で世を変えるといううたごえ運動の物語は破綻した．また，デモに参加した若者たちはこの物語が破綻したということを現場で目撃し，物語の破綻を共通知識として知ることになった．歌の力には限界があるということ，そしてそれをみんなが知っているということを知った．

物語とは出来事の因果関係を説明するためのものであり，現実の出来事が物語で説明できない以上，その物語の運命はそこで尽きる．うたごえ運動の物語は運動の根拠であり，物語の破綻は運動の意味を根本から掘り崩すことになった．

結論 歌をめぐる権力

民間放送の普及とうたごえ喫茶の登場により，歌いたい若者の関心を引く競争においてうたごえ運動は優位を失った．そしてスターリン批判と安保闘争の結果，運動の意義を明快に説明する物語も破綻した．その後もうたごえ運動は平和運動を柱に存続し，現在に至る．しかし，1950年代のような社会的影響力を持つこともなければ，多くの人が口ずさむ愛唱歌を世に送りだすこともなくなった．歴史的事件としてのうたごえ運動は1960年代半ばで終わったといってよい．

うたごえ運動において若き音楽家たちと若き革命家たちは欲望を共有していた．それは大衆を啓蒙したい，大衆運動を煽動したい，前衛でありたいという欲望である．だから，運動においては自分たちが頂点にいるピラミッド型のヒエラルヒーが想定され，彼らはその想定，すなわち物語にもとづいて行動した．

うたごえ運動は若者の身体をめぐる権力闘争だった．それは音楽家と革命家がときに協調し，ときに反目しつつ，若者たちに歌わせることで自分たちの目的にとって「望ましい若者（像)」を構築し，従わせようとする争いである．うたごえ運動の組織はそのためのテクノロジーだった．革命歌と音楽家は「音楽ないし社会の進歩のための大衆運動を組織する」という物語を実現するために一時的に共闘していたのである．

うたごえ運動のなかで歌う行為のなかで，オーディエンスとしての「若者」が歌うことによって構築されたことにも注目すべきだ．若者は「若者にふさわしい」明るく健康的な歌を好み，「若者らしく」みんなで集まって歌うことで，理想的な「若者」になった．若者は理想的な若者になるためにうたごえ運動に参加したのである．いつの時代もそうだが，若者こそ，他者からの目を気にして若者らしい若者になろうとするものである．そうした理想的な若者像を手に入れる代わりに，若者たちは音楽家や革命家たちの戦略に一時的に服従し，ミームを受け入れられたのだ．

若者たちは音楽家や革命家に一方的に従わされる受け身の存在ではなかった．従順なようで十分にしたたかだった．そうであるからこそ爆発的に発展した運動は若者たちの選択によって突然の終焉を迎えたのである．

1「うたごえの若人たち　埋れ(ママ)たベストセラー『青年歌集』物語」『サンデー毎日』1955年5月8日号，22ページ．

2 キース・E・スタノヴィッチ（椋田直子訳）『心は遺伝子の論理で決まるのか　二重過程モデルでみるヒトの合理性』みすず書房，2008年，248ページ．また，ミームの定義については，スーザン・ブラックモア（垂水雄二訳）『ミーム・マシーンとしての私』上下巻，草思社，2000年にも多くを負った．

3 詳細は，C・ダニエル・デネット（阿部文彦訳）『解明される宗教　進化論的アプローチ』青土社，2010年の補論A「新しい自己複製子」を参照．

4 ブラックモアは両者を厳密に区別できないことを指摘した上で，「指示のミーム」と「産物のミーム」という表現を提案している．この論文では物語のミームと区別することを主たる目的として「指示のミーム」という表現を使う．

5 例えば，うたごえ運動の紹介記事のなかには「「正しく歌う」こともねらいの一つだ」という表現がある（『朝日新聞』東京，1961年12月18日朝刊11面）．また，歌唱指導に際してはドイツの合唱・声楽教本である『コールユーブンゲン』が定番として使われており，さまざまな現場で「正しい歌唱」が意識されていた．また，『うたごえ新聞』の新曲紹介は実に細かく「正しい」歌唱を指導していた（例として『うたごえ新聞』東京，1958年8月15日3面）．

6「青年歌集」『週刊朝日』1955年2月27日号，51ページ．「うたごえの若人たち」22ページ．

7 中央合唱団自身が混声四部だった．「転換期の歌ごえ運動　スターリン平和賞の受賞を機に」『サンデー毎日』1956年1月8日号，17ページ．一般のサークルでも混声四部の例は多い．「縁　青春の詰まった混声合唱団」（『朝日新聞』東京むさしの，2008年8月24日朝刊34面）．

8 こうした例は極めて多い．例えば，奈良の著名な合唱サークル「蟻の会」は奈良女子大学と奈良学芸大学（当時）の学生からなるサークルだった．「知られざるベストセラー　青年歌集」『週刊朝日』1955年6月26日号，6ページ．

[9]「『うたう会』は女性との交流を考えるようになった．（略）そこから本当に理解しあい，平等の立場から話し合う恋愛も生れ(ママ)た（神奈川・横船うたう会）」(『知性』臨時増刊号「日本のうたごえ」,1956年4月,28-29ページ)など,こうした例は多い．上坪陽「激動の大学・戦後の証言27　歌ごえ運動」『朝日ジャーナル』1970年5月17日号32ページ,35ページほか．実際に結婚した人も多い(「縁　青春の詰まった混声合唱団」(『朝日新聞』東京むさしの，2008年8月24日朝刊34面)．

[10]「読者投稿・若い世代の公開状　うたごえ運動の在り方について」『知性』1956年1月号，124-125ページ．

[11] 国鉄大井工場（当時）の例．「うたごえは何処へゆく　メーデー前後の明暗」『サンデー毎日』1956年5月6日号，4ページ．

[12] 城戸浩太郎「うたごえは起っ(ママ)ている」『知性』1955年6月号，130ページ．

[13]「小さい子供までが教室で思わず「お富さん」を口ずさむこの頃のチマタのメロディーのたいはいを（略）」(「特集読者からのこだま」『平和』1955年3月，61ページ)，「お富さん的卑俗な歌や（略）」(「ひととき　若人のうたごえ」『朝日新聞』，東京，1955年5月12日夕刊2面）など極めて多数．

[14] 具体的な曲名をあげているわけでなく，やや情緒的な表現だが，「まだ一ど(ママ)も電波にのったことのないうたごえが，ジャズや流行歌を押しのけて，新しい日本の流行歌となろうとしているではないか」(城戸「うたごえは起っている」133ページ)という発言がある．とはいえ,ロシア民謡がまったく放送されなかったわけではなく，例えば，1946年1月21日のラジオ（NHK）番組欄には「世界童謡めぐり（一）ロシヤ(ママ)の巻・関種子外（略）」という記載がある（『朝日新聞』東京，1946年1月21日朝刊2面）．また，「ラジオ東京　1:20　世界のうた「ロシア」」(『朝日新聞』東京，1955年3月18日朝刊5面）という番組表の記載もある．

[15]「富士山は生きている11　歌いまくる学生登山」『朝日新聞』東京，1955年7月16日朝刊11面．

[16] スタノヴィッチ『心は遺伝子の論理で決まるのか』69-70ページ．

[17] 前田愛『近代読者の成立』岩波書店，2001年，362-363ページ．

[18]「頽廃的な文化をなくすためには，やはり若い人たちが力をあわせて，生活の中から生まれる本当の文化を育てていかなければ，植民地文化は消滅し得ないことを教えられたのです」(『知性』 臨時増刊号，1956年4月，37ページ)．

[19] 上坪「激動の大学」31ページ．

[20]「座談会　音楽センターにて　歌は世につれ 「日本のうたごえ」について」『平和』1955年3月号,49ページ．「やがて住民たちは理解していった」というような理解には中央合唱団側の「前衛」的な意識がうかがえる．

[21] マイケル・S－Y・チウェ（安田雪訳）『儀式は何の役にたつか』（新曜社，2003年）11-12ページ．

[22] ブラックモア『ミーム・マシーンとしての私　下』97-99ページ．

[23]「(略）文化活動はこの流れの中にあって古いきづな(ママ)を断ちきろうとする運動である（略）」(山田あき「新しき歌ごえ」『短歌研究』第9巻第9号，1952年，62ページ)．「サークルそのものがたゝかったのではないにしても，やはりそこに大きな仂(ママ)きをしているんですね」(サカイトクゾー「詩サークル運動の発展」『人民文学』第3巻第2号，1952年，55ページ)．

[24] 多田洋一「詩集「平和のうたごえ」」『人民文学』第3巻第2号，1952年，58-60ページ．木俣修「短歌の抵抗について　ヒユ(ママ)ーマン微かな歌ごゑ」『人民短歌』第4巻第8・9合併号,1948年8月,1-5ページ．岡本潤「歌ごえは津々浦々におこる　日本詩のレジスタンス(全国詩誌めぐり)」『新日本文学』第5巻12号，1950年,34-39ページ．一條徹「独立と平和のための歌声　最近の短歌と短歌運動によせて」『新日本歌人』第5巻第6号，1950年，12-18ページなど多数．

[25] 以下を元に構成した．「日本のうたごえは燃上る(ママ)！」『眞相』臨時増刊第77号，1955年1月15日号,31-34ページ．「ひととき　若人のうたごえ」『朝日新聞』東京,1955年5月12日夕刊2面．関鑑子「世界のうたごえは起っている　うたごえサークルの皆さんへ」『知性』第2巻第9号,1955年,38-41ページ．「きのうきょう　コーラス」『朝日新聞』東京，1955年9月8日朝刊3面．城戸浩太郎「一九五五年・日本のうたごえ祭典の記」『知性』第3巻第1号，1956年1月，220-221ページ．

[26] 野家啓一『物語の哲学』岩波書店，2005年，295，313，326ページ．

[27] 野家『物語の哲学』313ページ．

[28] 註２５を参照．

[29] クロード・ブレモン（阪上脩訳）『物語のメッセージ』審美社，1975年，96ページ．

[30]「転換期の歌ごえ運動」17ページ．「グループ訪問　中央合唱団」『知性』1956年4月号（写真記事・ページ番号なし)．

[31]「『ラ・マルセイェーズ』のごとき戦闘の歌はついにおこらなかったのである」(さいとうふみお「歌なきうたごえ　思想運動としての意味はなにか」『思想の科学』第33号，1961年，48ページ）とあり，著者のさいとうはうたごえ運動の安保闘争における敗北を認めている．

[32] デネット『解明される宗教』205-206ページ．

[33] ソ連の新作歌謡曲も含めて「ロシア民謡」と呼ぶことが多かった．

[34]『青年歌集　第一集』は全86曲のうち19曲がロシア民謡であり，日本民謡の17曲をしのぐ（「青年歌集」51ページ)．うたごえ運動を全面的に支援していた雑誌『知性』の臨時増刊号（1956年4月臨時増刊号「日本のうたごえ」）の付録「日本のうたごえ愛唱歌集」は全72曲中，新作曲が21曲，ロシア民謡が8曲，ソビエト歌謡が11曲，日本の民謡が6曲，日本の近代の歌が1曲（「早春賦」）であり，ロシア民謡とソビエト歌謡が多かった．

[35]「多摩地域　広がる歌声」『朝日新聞』東京むさしの，2008年5月18日朝刊．

[36]「シニア集う調布の「うたごえサロン」」『朝日新聞』東京むさしの，2008年7月8日朝刊．また，著者が東京新宿のうたごえ喫茶「ともしび」で実見（2008年7月19日)．

[37] 上坪「激動の大学」31-35 ページが当時の雰囲気をよく伝えている.
[38] 上坪「激動の大学」31-32 ページ.
[39] 井上頼豊「歌ごえと国民音楽」『国民の科学』通号第 7 号，1955 年，7-11 ページ.
[40] 林光「うたごえ運動の意義」『音楽芸術』第 13 巻第 9 号, 1955 年, 77-82 ページ．芥川也寸志「「うたごえ」について」『平和』第 39 号，1955 年，20 ページ.
[41] 井上「歌ごえと国民音楽」9 ページ．箕作秋吉「民謡と音楽」『人民文学』第 3 巻第 2 号, 1952 年, 51-53 ページ．園部三郎「新しい歌ごえ　帰還者楽団のこと」『テアトロ』第 12 巻第 8 号，1950 年，46-50 ページ.
[42] 当時，うたごえの音楽家たちの憧れの対象だったショスタコーヴィチは体制側から厳しく批判され，音楽活動に著しい支障を来していた（千葉潤『作曲家　人と作品　ショスタコーヴィチ』音楽之友社，2005 年，114 ページ，126-127 ページ）．スターリン批判前のうたごえの音楽家はそのことを知るよしもなかった.
[43]「福岡・もぐらコーラス（三菱飯塚鉱業所内）49 名　「うたごえ運動」は純粋な「うたごえ運動」以外のものに走ったり，また他から利用されたりするのを黙認していたらけっして発展しないものだと思っています」(『知性』臨時増刊号，1956 年 4 月，32 ページ）など.
[44] 日本放送出版協会編『放送の 20 世紀　ラジオからテレビ，そして多メディアへ』(日本放送出版協会，2002 年）89-90 ページ.
[45] 稲田植輝『最新　放送メディア入門』(社会評論社，1998 年)，54 ページ.「Sony History　第 7 章“ポケッタブル”は和製英語？」[http://www.sony.co.jp/SonyInfo/CorporateInfo/History/SonyHistory/1-07.htm]2012 年 1 月 9 日有効.
[46] 稲田『最新　放送メディア入門』55 ページ.
[47] 稲田『最新　放送メディア入門』53 ページ.
[48]『味楽』の店員だった水野里矢の回想によれば，水野の提案でロシア民謡のレコードにあわせて客とともに合唱するようになったのは 1956 年だった．なお，『味楽』はそれ以前からもロシア民謡のレコードをかけていた（丸山明日果『歌声喫茶「灯」の青春』集英社，2002 年，42 ページほか).
[49]「喫茶店にわき上がる合唱　「街の歌声・さあ歌おう」TBS テレビ」『朝日新聞』東京，1961 年 12 月 18 日朝刊 9 面.
[50] うたごえ・ぐるーぷ「うたごえ」(ビクター，1961 年)，大橋節夫とハニー・アイランダース『ステレオうたごえ喫茶』(コロムビアレコード，1962 年）など多数.
[51] 吉永小百合，和田弘とマヒナスターズによる「寒い朝」(1962 年）など．和田弘とマヒナスターズはほかにも「北上夜曲」(1961 年，ダークダックスと競作）や「北帰行」(1961 年，小林旭と競作）などのうたごえ喫茶の愛唱曲をカバーしている.「北上夜曲」もまたロシア民謡によく似た，もの悲しげな短調の曲である.
[52] 丸山『歌声喫茶「灯」の青春』62-63 ページ.
[53] 戸板康二「東京だより　うたごえの店」『朝日新聞』東京，1960 年 9 月 18 日朝刊 14 面.